

小學新讀本

笠間益三編輯

卷五

220

| | | | |
|---------|----|----|----|
| 大日本圖書會館 | | | |
| 一 | 二 | 三 | 四 |
| 八册 | 七號 | 二架 | 五函 |

| |
|-----|
| 260 |
| 554 |

檢定申請本

| |
|--------|
| K120.8 |
| 3a |
| 52 |

K120.8

3a

5

笠間益三編輯

版有小有新讀本

東京 杉木氏藏版

學小新讀本卷之五

笠間益三編輯

第一

日月を流るゝ水の如く一たびさ
りては返らば〇故に學問を勤
め業をはたむ者は光陰をおも
一秒比時間をもいせらに費さ

ぞ○光陰を惜まば徒らふ時間を
費はものハ世ハ生息を也雖も夢
中ハ老をざるに異ならず○老ハ一
ハ時間かり坐て意とせざれを終
ハ多くの時間を失ひ老いをつ
るまで一事をも成をと能ハば○
毎朝一時づゝおぼく起せば一年

ハ三百六十五時分失ひ○毎夜一
時間はやく寝れば五年の間ハ老
千八百二十五時を損を○去りて
返らぬ光陰を斯く睡眠中に過ぶ
老ハ惜むを盡きぬを知らずや

第二

今の年號を何と云ふや明治と云

ふかり○我國上古八年は號を定め
めど天皇即位の年を以て元年とし
此より幾年と通算せり○中古
孝徳天皇の代に至り始て年號を
置き大化と云ふ大化より明治に
至るまで元を改むると二百四十
年を経ると千二百四十とを○汝

等歴史を讀む方り年號の次第
を諳ぜざれを時代の遠邇を知る
よ由なし故に汝等他日歴史或學
ぶにも先づ之を知るは要に

第三

曆ハ一年中の月日氣節等を詳か
に在るものふて吾人日常必用の

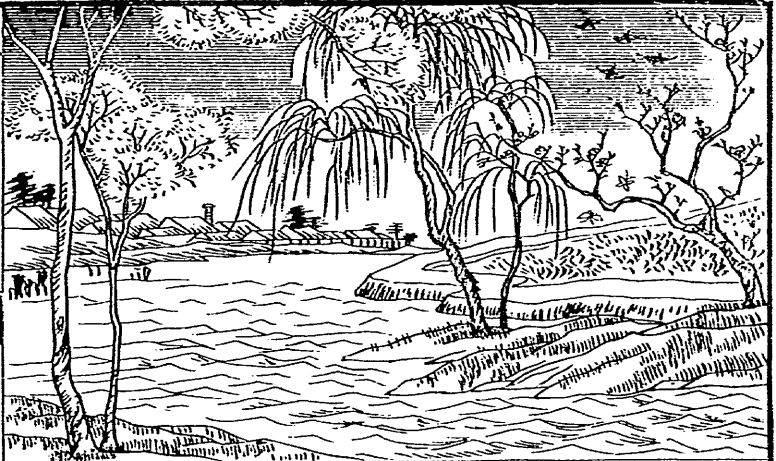
ものたり○我國よては推古天皇の御宇に百濟國の僧始て之を傳へたり其後次第に改正し今は西洋より用ゐる曆法を取れり○一年を分つて立春、雨水、啓蟄、春分、清明、穀雨、立夏、小滿、芒種、夏至、小暑、大暑、立秋、處暑、白露、秋分、寒露、霜降、立冬、

小雪、大雪、冬至、小寒、大寒の二十四氣とを春分、秋分は晝夜長短均しく一年中寒暖中和の時とを此日は毎年三月九月の二十一日頃にして俗に之を彼岸と云ふ宮中に於ては畏くも至尊親しく歴代の天皇祇祭らせ玉ふ日かり○夏至

は日最長く冬至ハ日最も短き極
度ふして亦六月十二月の二十一
日頃に在り

第四

春の時候ハ温ふして其景色いと
のぞるふ人々の心為自ら優しく
なるとの也○鳥ハ時を得がほふ



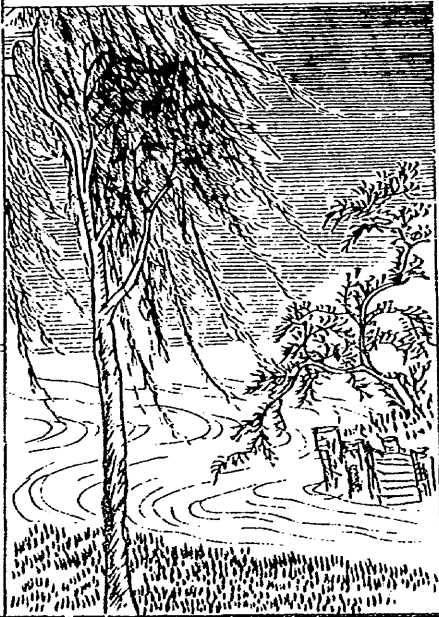
さへづり魚は戯れ
て池に躍り蝶は娛
みて菜畦ふはふ○
野外の桃櫻ハ紅白
此花咲きまぶれ若
芽の草と相映ト其
かが免限かー○水

邊此柳ハ其葉青々として細長き
枝をたき春風になびける様を形
はふ美ハ一、

第五

柳ハ白楊川柳等の種類有り○
垂柳ハ世人此最賞するものにて
此木を濕地好むが故不多くハ

水邊不在り○をれども水不遠が
かる地に茂りやまき茂以て市
街此並木又庭園不植る不宜し
○柳不風折な
志とはたけき
人此心をよき
程不何しらひ



て逆はさきバ我身不害汝受ると
 なま汝謂ふなま○古人の句は氣
 ふいらぬ風汝何らうふ柳か那を
 詠せしも蓋此心を酌みしならん

第六

茲は男兒と女兒と何り男兒ハ竹
 を削り紙を張りて紙鳶を作り○



女兒を赤、白、青、黄、緑、
 紫、紺、茶、縹等色々の
 絲を以て手鞠状飾
 り居きり○此紙鳶
 をく出来何が至て
 之を揚げおバ男兒
 を定めて嬉しから

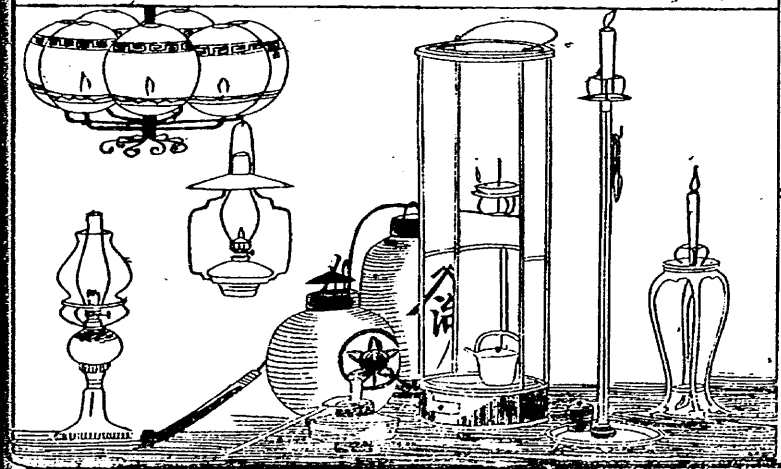
ん○又此手鞠をみごとくに作り
げて之を投かむ女兒を大ふ樂
かるを遊戯○遊戯を好すに自から
工風して作りたる道具を用るれ
ハ一入面白きものなり○遊戯の
道具のみならず總て何事も工風
を爲るを身立立て家を興し國

富まばの基ふして世をかやか
を燈火なり○故に幼稚の時より
一事を聞き一物を見るも宜し
く意を用るて事物を工風をると
を務むを

第七

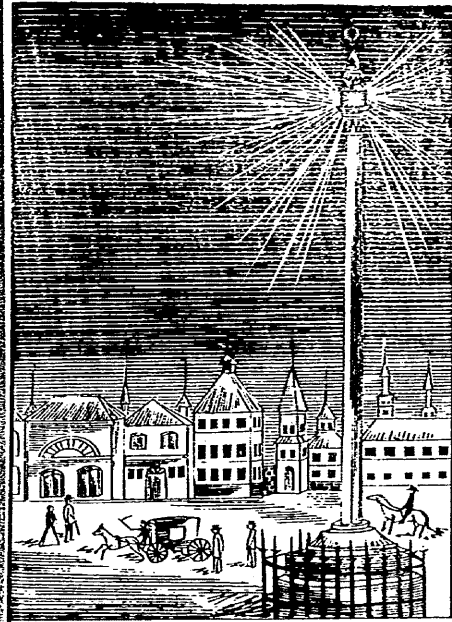
夜ふ入りて室内ふ明りを取るに

ハ燭臺、行燈、ランプ
 を用ゐる也。○歩行
 の時用ゐるは提
 灯あり。○燭臺、提灯
 はハ蠟燭を立て、
 火炷を以て。○行燈
 にハ通常菜種油



を用ゐるれども或る地方よてを鯨
 油亦用ゐるるあり。○ランプは光ハ
 明なきども石炭油を用ゐるるが故
 小注意せざれば危し。○然きども
 火どめ石炭油を用ゐるまば決して
 斯の患なく實は安全なるもの也
 ○此外電氣燈あり瓦斯燈あり共

其他此燈火より比をせば其光甚だ
 清き故に都會の街衢にも之を
 用るるを便也 ○電氣燈ハ電氣



の作用を以て
 光をまらつ仕
 掛ふて高く一
 基は長竿より

次せば遠く數十丁此間をてら
 て白晝の如し ○瓦斯燈も種々の
 仕掛ある火基を一定の所より之
 付け瓦斯管をうばめて地下を通
 一之を四方に各所に配分也 ○其
 配分せる各所の火口より油をさ
 ず燈心を挿まざれども火成

点をまは忽焰を發するなり

第八

幼少の時ハ大才ひ才發ある人と
雖も未だよく世間の事物よなれ
ざるが故ニ何事も老人長者の教
訓ニ從ふ處一〇抑又人ハ生れか
がらにして事物を知るもの非

ぞ〇故に學校の設け何りて兒童
に色々の學業を授くる所也〇學
校ニ入り書を讀み智をひらき才
を長ぶると皆世間の事物よ通ぜ
んが爲免形れむたゞ空しく讀み書
き算術をささるのみからび成長
の後物ニ應ト事不當るの用意と

心得べし。○而して教師は兒童を教へみちびくは親は子をやしなふが如く其恩の大なること限りなし。○すれば兒童を亦師とすはかふるは父母事ふるが如く最尊敬せざるをゆるさず

第九

吾人の住居する地面ハ山海の高低あれども全体の形狀を考ふれば平面あるが如く想はるゝなり。○然ども大地の形は平面からずして球又ハ橙子の如き圓体あり其山海の高低ハ橙子表面の凹凸に異からず故に大地を地球と稱

をるあり○總て地球上の事物を
考究をる學を地理學と云ふ地理
學ハ人世必用のを此かれバ其講
究を怠るをらび○今茲ハ我日
本國の大形を記さん日本國ハ四
箇の大島と數多の小島より成り
り○中央の最大かるを本島と云

ひ本島の南ハ二島あり其西かる
を九州と云ひ其東かるもの
を四國と呼ぶ本島の北ハ一島何
り蝦夷と云ふ以上を總稱して四
大島と云ふ○其他小島の中重か
るをハ千島琉球八丈島隱岐對
島佐土壹岐等と云○全國を大分

一て一畿八道中一之を小分して
八十四國とを

第十

人を陸地の上或步行をる而已ふ
何らび大波をおろして海を渡り
又河上を行くことを多ければ其間
よ船の覆へるとかいとせば○さ



れを己の難を逃る
ゝが為免又を人の
おぼるゝ或濟はん
が為免ふを須く游
泳の技を學ぶべし
○之或學ぶにハ自
らかまどりませる

能く師よけきて習ハざれば大切
ある生命を失ふと何ぞ○又已ハ
游泳はるふとを得ると未熟の少
年をさぢひ出ま等を最戒むをま
事よて必師よけ死ま行くを好
とす

第十一

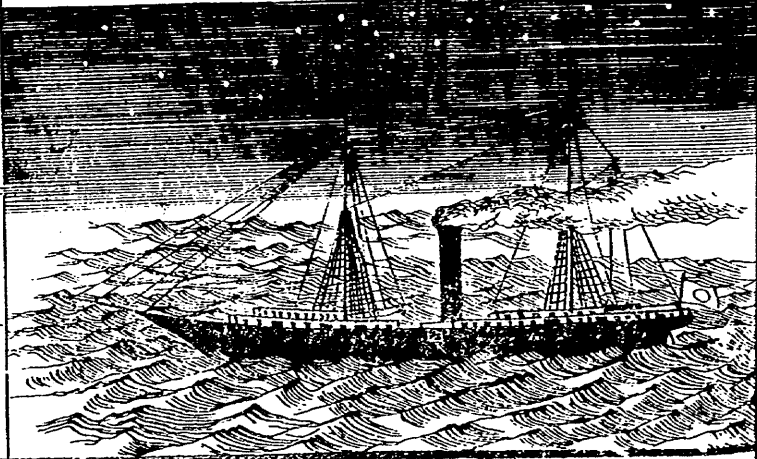
我親友の一人ハ去年西洋北或る
國へ遊學ゆり○西洋とは我國と
り遠く大海を越へてたる諸の國
を謂ふなり○西洋よゆくふハ數
千里北大海を渡るが故よ數十
日の間は陸地を見ること何ぞを
たゞ茫々たる波濤と蒼々たる天

空に望むれみ○此の如き航海は
 我をふし路を誤らば能く其思
 ふ處は届くは如何か工風は依
 るとのかる乎其大略を次此章に
 とき聞かさん

第十二

世界を廣く万国ハ遠くと雖も人

類の行き得べき所
 一ハ日光の照さば
 る所なく星月の輝
 かざる所か一○是
 を以て大海に航行
 するにハ晝を太陽
 によりて方位を知



り夜ハ星又冬月を目何てとして
方向既定むるなり○衆の星北中
ホテ航海者に最要あるものを北
極星ホシて此星ハ常に其居り處
を變ふるホトホシ○又船内に冬
磁石を懸け照へて方角を明ホシ日
月の位置とてらし合せて航路を

知るホト容易かり

第十三

草木ノ類甚ダ多キ中ニ世ニ最モ
益アルモノハ四木三草ナリ○四
木トハ茶漆桑楮ニテ三草トハ麻
紅花藍是ナリ○桑ハ蚕ヲ養フニ
必用ノモノニテ葉ノ形圓キモノ

ト岐アルモノトアリ皮ハ紙ヲ製
 スベシ○紙ヲ製スルニハ藤皮或
 ハ蒙ボロ屑三义ナドヲ以テスレ
 匠楮ヲ以テ漉キタルニ勝ルモノ
 ナシ○楮ハ桑ニ似テヤ、大ナリ
 ○其幹ヲキリ皮ヲハギ採テ乾カ
 シ製紙ノ料ニ供ス○紙ハ諸國ニ



産スレドモ越前
 奉書土佐半紙等
 最有名ナリ○我
 邦ノ紙ハ質カタ
 クシテ破レ難シ
 襖屑製ハモロク
 シテ損シ易シ○

茶ハ我邦ノ名産ナリ其葉ハ椿ニ似テ稍小ク花ハ白クシテ梅花ニ似タリ○之ヲ植ルニハ水氣多キ地ヲキラヒ赤土ニシテ砂石ノマヅリタル地ヲ好トス○製法ニ種々アレドモ通例四五月ノコロ枝ヨリ生ズル新芽ヲツミ取りテ釜

ニテイリ之ヲモミテ再ビ釜ニ入レ水分ヲ去ルナリ○湯ニ和スレバ芳香ヲ放チ淡白ナル美味ヲ生ズ○漆ハ其樹ノ皮ニ疵ツケ流レ出ル液汁ヲスクヒ取テ之ヲ製シ種々ノ顔料ヲ和シテ器物ニ塗ル之ヲ漆器ト云フ而シテ其實ハシ

ボリテ蠟ヲ製スベシ

麻ハ其皮ヲ剝ギ製シテ線トナシ

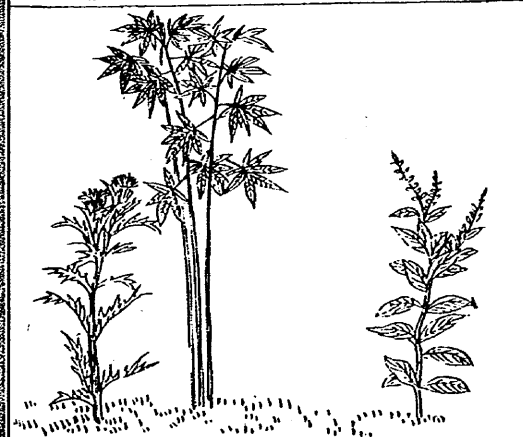
布ニ織ル○紅花ハ

其花ヨリ染料ヲ取

ル○藍モ亦染料ニ

シテ需用最多シ○

之ヲ製スルニハ苳



リテ日光ニカハカシ葉ヲトリテ

水ニヒタシタル後筵ニ包ミ期ヲ

待チ白ニ移シ數回之ヲツキテ一

塊トナシ再ビ乾カメ水分ヲ去ル

ナリ之ヲ藍玉ト稱ス○其產地ノ

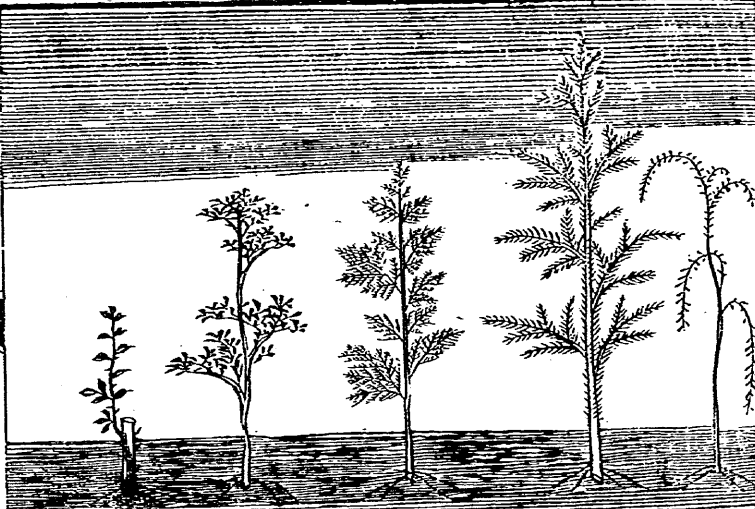
名所ハ四國ノ阿波ニシテ之ヲ産

出スルヲ以テ巨万ノ富商少カラ

ズ本地ハ全國中ニ於テ夙ニ富裕
ノ聞エアリ

第十四

凡樹木ハ各其種子ヨリ同類ヲ生
ズルコト通常ナレ凡人力ニヨリ
テ之ヲ増殖スルコトヲ得ベシ○
一株ノ樹モサシ枝トリ枝ノ術ヲ



施ストキハ或ル
種類ノ樹木ハ容
易ニ繁殖ス○今
茲ニ挿枝取枝ノ
法ヲ畧記セン○
挿枝ハ春ト秋ト
ノ候ニアタリテ

八寸ヨリ一尺二三寸ニキリ取り
 タル樹枝ヲシメリ氣アル土中ニ
 挿ミ置ク片ハ數日ヲ經テ根ヲ生
 ジ終ニ一株ノ幹トナル○取枝ハ
 樹枝ヲタハメテ土中ニ淺ク埋メ
 其上ニ石ヲヲキテ重ミヲ加ヘ置
 キ根ノ生ズルヲ待テ他ノ園圃ニ



移スナリ○或ハ直
 チニ土中ニ埋メズ
 土ヲ盛リタル箱ヲ
 ス工樹枝ヲ其中間
 ニ貫キ時々水ヲソ、ギ根ヲ生ゼ
 シムルモ可ナリ○挿枝取枝トモ
 ニ柳蓄薇躑躅葡萄ナドニ施スニ

適ス○挿枝ハ杉檜ニモ之ヲ施ス
コトヲ得ルナリ

第十五

コレハ兩親ト共ニ家ニ在テ朝夕
敬ヒツカフルコトヲ好ム○朝早
ク起レバ父母余ヲ見テ悦ビタマ
フガ故ニ余モ亦父母ノ悦ビ給ヘ

ル顔ヲ見テイト樂シキト思ヘ
リ○余ト共ニ父母ニ侍スル者ハ
兄弟姉妹ナリ斯ク打チ揃ヒテ父
母ニ事フルコトヲ得レバ更ニ遺
憾ナルナシ○古ノ人モ父母共
ニ存シ兄弟故ナキハ一ノ樂ナリ
ト言ヘリ○又父母兄弟姉妹互ニ

心ノヘダテナク
 睦マジク暮スハ
 一家幸福ノ基タ
 リ○ワラフ門ニ
 ハ福來ルト云ヘ
 ルハ實ニ道理ア
 ル諺ナリ



此圖ヲ見ヨ老イタル人ト若キ人
 ト幼ナキ人トアリ○若キ人ハ老
 人ノ子ニシテ幼ナキ人ハ老人ノ
 孫ナラン○此人々ノ打チツドヒ
 テ相親ム様ハ實ニヤサシク且ユ
 タカナリ○余ハ此人々ヲ見テ自
 ラ尊敬ノ心ヲ起セリ○吾々ノ親

族モカク睦クシテ且優ナルトキ
ハ他人ノ尊敬ヲ受クルナルベシ

第十六

余ハ常ニ父母ニ孝行ヲ盡ス
至ラザルヲ恐ル、ナリ○余ガ孝
行ヲ盡サント思フ心ハ父母ノ余
ヲ深ク愛シソダテ給フ慈悲ノ親

切ナルニハ及ビ難シ○ワレ若シ
病アレバ父母共ニ大ニ憂フル色
アリ又課業ヲ怠レバ父母共ニ喜
バザル色アリ○是父母ワレヲ愛
シ給フ深キガ故ニ病アレバ余
ガ身ノ苦痛ヲオモヒヤリテ憂フ
ル色ヲアラハシ給フナリ○課業

ヲ怠レバ余が成長ノ後ヨキ人ト
ナルマジキヲ思ヒテ喜バザル顔
ヲナシ給フナリ○サレバ余ハ飲
食ヲツヽシミ体操ヲナシテ身體
ヲ健カニスルヲ務ムベシ○又
學校ニ行キテハ業ヲハゲミ家ニ
在テハステニ修メタルゴトヲ復

習シテ忘レザル様心懸クベシ○
身體ヲ全クシ道ヲ守リ智ヲミガ
キ自己ノ名ヲ世ニアゲテ父母ノ
名マデモ現ハスハ孝行ノ至ナリ

第十七

學校ヨリ飯リタル後復習ヲ了ヘ
ナバ外ニ出テ遊ブベシ○然レモ

我身ニ傷ツクルトキハ父母患フ
ルガ故ニ危フキ遊ヲ爲ス可ラズ
○石ヲ投ゲ木ニ登リ或ハアバレ
打チ合ヒ妄リニ水ニ泳グナドハ
皆危フキ遊ナリ○又樹木ノ枝ヲ
折リ花ヲチラシ庭園田畠ヲアラ
シ鳥獸虫魚ヲ苦シムルガ如キ益

ナクシテ害アル戲ヲバ爲ス可ラ
ズ○摠テ遊ハ心ヲ樂マシメ智ヲ
関キ體ヲ壯健ナラシムルヲ主ト
スベシ○男子ノ遊ハ鬼渡シ玉投
ゲ輪回シ或ハ紙鳶ヲ揚グルナド
ヲ宜シトス○此等ハ皆身體ヲ健
ニシ手足ノ運動ヲ起スモノナリ



○女子ノ遊ハ羽
子ヲツキ手鞠ヲ
弄ブ等ヲ最宜ト
ス○女子ハ男子
ノ如クトク走り
飛ビ躁グナドハ
宜シカラズ何事

モ柔和ナルヲ專一トス○男女共
ニ木片ヲ取り集メテ箱ヲ作り或
ハ家ノ形ヲ組ミ立テ土砂ヲモリ
テ山ヲ築キ堤ヲ築クノ仕方ヲナ
ス等ハ工藝ノ初步ニテ好キ遊ナ

り
學新讀本卷之五終

K1208
20-1

學新讀本
卷之五
三
星文館

明治二十年四月七日版權免許

同 年六月 刻成

定價金九錢

福岡縣士族

編輯人 笠間益三

福岡縣筑後國三池郡
橘村七百二十五番地

東京府平民

出版人 叔本七百九

東京日本橋區大傳馬町
二丁目二十四番地

小
賣
不
卷
之
五
三
星
文
館

